

文化ぶん・くら暮らし

子宮頸がんワクチン「有効」

子宮頸がんの予防啓発を目的とした市民講座が昭和・アピオで開かれた。副作用の恐れがあるとして接種の「勧奨」が中止されている予防ワクチンについて、産婦人科医師で山梨大付属病院医療福祉支援センター長の端晶彦さんが有効性と安全性、副作用のリスクを説明した。

子宮頸がんの予防ワクチンは、がんを引き起こすヒトパピローマウイルス(HPV)の感染を防ぐために接種。肩の部分に筋肉注射する方法で、6カ月以内に3回接種する。4月から、小学6年から高校1年相当の女子を対象に定期接種となっていた。

端さんは、現在使用されている2種類の予防ワクチンは接種によってHPV

山梨大病院の端さん、安全性やリスク説明



子宮頸がん
予防ワクチン
検診

子宮頸がん予防ワクチンの有効性と安全性、副作用のリスクを説明する端晶彦医師

＝昭和・アピオ

HPVの感染を防ぐ効果が証明されている、と紹介。HPVは性交渉によって感染することを踏まえ「12、13歳で接種していれば、年間約6700人が感染しなくて済み、約2350人が亡くならずにすむ」と話した。日本国内では、年間約1万人が子宮頸がんにかかり、約3500人が亡くなっている。

厚生労働省に寄せられている副作用には、筋肉や関節などの激しい痛みとを紹介した。筋肉注射

は痛みを伴うため、「多感な12、13歳は副作用が出やすく、外国では思春期の女性に多いというデータもある」という。端さんは「予防ワクチンは世界120カ国で認められており、有効で安全性は高いと考えられるが、不安であれば積極的接種の勧奨が再開してから接種してもいい。3回接種する期間が6カ月以上に延びても、効果は期待できる」と話した。

副作用による健康被害に対する補償や救済制度を充実させたり、適切な治療が速やかに受けられる仕組み作りを進めるべきとの考えも示した。講座は日本産婦人科医学会がん部会の研修会。県産婦人科医会と合同で企画し、県内の産婦人科医師や自治体職員、一般市民など約80人が参加した。